



バルザック全集

24

東京創元社

バルザック全集 第二十四卷



昭和四十九年七月二十五日 発行

訳者 寺田 透
中村 真一郎

朝倉 季雄

発行所

代表者 秋山 孝男
(株) 東京創元社

電話 (162) 東京都新宿区新小川町一―一六
東京 (〇三) 二六八―八三三一
振替 東京 京 一五五 六五

印刷・刷 刷 株式 会社
製本・株式 会社 鈴木 製本 所
用紙・北越 製紙・富士川 洋紙 店

万一、落丁・乱丁がありましたらお取替えいたします。

July 1974 Printed in Japan. © TOKYO SOGEN-SHA

バルザック全集

第二十四卷

目次

モデスト・ミニヨン・・・・・・・・・・三

ソーの舞踏会・・・・・・・・・・二四

ド・カデインヤン公妃の秘密・・・・・・・・二九七

解説・・・・・・・・・・三五三

装幀 松田正久

モ
デ
ス
ト
・
ミ
ニ
ョ
ン

寺
田

透
訳

あるポーランドの女性に

奴隸なる国土の娘、愛によりて天使、空想によりて魔神、信によりて幼児、経験によりて老翁、頭脳によりて男、心情によりて女、希望によりて巨人、苦悩によりて母、おのが夢によりて詩人なるおんみよ。尚また『美』にてもあるおんみに、このおんみが愛、おんみが空想、おんみが信、おんみが経験、おんみが苦悩、おんみが希望、おんみが夢の、あたかも豎糸をなせるがごとき作品をささぐ。さりながらその豎糸に支えらるる横糸は、おんみの魂に抱かるる、現われ出でておんみがかんばせを輝かすや、おんみを讃美するものにとりてその表現、正しくすでに亡びし言語に用いられたる文字の、学匠に対する意義とひとしき意義を持つ詩に比ぶれば艶淡きものなり。

一八二五年十月のはじめ、公証人のシモン・ピラス・ラトゥールネルという人が、むすこと腕を組み、細君と連れだって、ル・アーヴルからアングーヴィルに向かう道をはって行った。そのそばを事務所の筆頭書記をしているジャン・ビュッチャという名のせむしの小男が、まるで小姓のように、歩いていった。この四人のうち少くも二人は、毎夕、この道を歩きつけていたのだが、その四人が、イタリヤ人の崖縁道と呼ぶのによく似た、一ところで彎曲する道の曲り角まで来たとき、公証人は、自分らの前からしろの段丘から自分の言うことを耳にするものが、一人たりといはしないかよく見た上、さらに用心の余り、中位の高さの声を出した。

「エグジュペール」と彼はむすこに言った。「わしはこれからお前にちよっとした掛け引きの指図をするが、それをよく頭をはたらかせて実行してもらいたいんだ。意味なん

ぞ探らないでな。けれどももし考えあてたら、わしは、お前に、それをあの忘却の河に投げ込んでしまうように命令する。公証人だの、あるいは司法職を自分のものときめいている人間は、みんな、自分の腹の中にこの忘却の河を、他人の秘密のために、持っているなければならないのだ。お前はミニョンさんの奥さんとお嬢さんと、デュメイさん御夫婦と、もしゴベネムさんがシャレにおられたらゴベネムさんに敬意を表し、義務と敬服の気持をお耳に入れるんだ。さてそれから一座が元通り静まると、デュメイさんがお前を部屋の際に連れて行くだろうから、そうしたらお前は、デュメイさんがお前に話をしている間中ずっと、ミニョンさんのお嬢さんをしげしげと（わしはこれはお前に許してやる）みつめていなさい。わしの友達あの立派な方は、お前に、外に出て、ひと歩きして、約一時間たってから、九時に、急用ありげな様子で戻って来るように頼むだろう。そうしたらお前は、つとめて息をきらした人間の息づかいをまねて、それからあの人の耳にこく小声で、とはいいがモデストさんに聞こえるように、こういうんだ、——若い男の人がやって来ました、とな」

エグジュペールは翌日、パリへ法律修行をはじめめるために出発することになっていた。こんなに出発が間近となっていたからこそ、ラトゥールネルは自分のむすこを、今の命令からそれと分かる重大な共同謀議の共犯者として、友のデュメイの手もとにさし出す決心もつけられたのだ。

「モデストさんは何かたくらんでいるという嫌疑を受けて

いらっしやるのですか。ビュッチャは御主人の細君に、臆病そうな声でそうたずねた。

「黙って、ビュッチャ」とラトゥールネル夫人は夫の腕をまたとって、そう答えた。

ラトゥールネル夫人は、第一審裁判所の書記の娘で、その生まれのおかげで、自分は法曹家系の出であると称する資格が充分あると思っている。こういう傲慢のしかたにすでに、なぜこの、少々膿疹のできすぎた女が、自分のおやじ殿の手で判決文が書きなぐられる裁判所の威厳をわが身に添えようとつとめているか、そのわけが示されている。

彼女は嗅ぎタバコをつまみ、棒杭のように体をつっぱらせ、名流婦人然と勿体振っていて、一瞬の間流電装置によって生命を与えられたミイラに申分なく似ている。とげとげしい声に貴族的な調子を与えようとこころみてはいるが、それが、自分の教育上の欠陥に蓋をするのに成功しないのと同様、うまく行かない。彼女の社会的効用は、彼女がかぶっている花を飾り立てたボンネットやこめかみに貼りついた鉢巻きや、彼女がえらぶローブを見ると、異論の余地ないように見える。もしラトゥールネル夫人流の女が存在しなかったなら、商人は一体どこにこういう産物を売りさばいたらいいか。この、本来慈悲深く敬神の念篤い立派な女性のあるおかしな点は、思うに、ほとんど気づかれずに見すごされたのであるが、あの面白づくでくさぐさの珍妙な生き物を時々飛び出させる自然が、彼女に、例の田舎の精神が考え出す何やかやを照らし出さんがために、連

隊鼓手長にうってつけの胴体を受けた。彼女はル・アーヴルから一度も出たことがない。ル・アーヴルは間違いのないところと彼女は信じている。何もかも彼女はル・アーヴルで買い、着るものもそこで作らせる。みずから、爪の先までノルマンディー生まれの女だと言っていて、父親をあげ、夫をうやまっている。小男のラトゥールネルは、十三という結婚不適齢期に達したこの娘を大胆不敵にも妻として、彼女との間に一子をあげることができた。彼はよそのどこからでも、書記がつけてくれる六万フランの持参金を手に入れたにちがいないので、人々は彼の余り普通でない勇猛果敢さを、もし彼が軽率にも若い綺麗な妻を家に入れたりして、家に火をつけたような場合、彼の個人的手立てをもつてしては、牛頭人身の怪物の侵入に対して身の安全を保証するのが困難なため、それを避けようとする望みのせいだと考えていた。公証人はただ全く、アニエス嬢（彼女の名はアニエスと言った）の数々の大なる美点をまとめ、妻の美しさなどは夫にとってはいかにすみやかに過ぎ去るものに留意しただけである。代父になつてくれた書記が、ノルマンディー風の名を無理につけた例の詰らない青年はというと、ラトゥールネル夫人は、三十五歳と七ヶ月で母となったことに今だに大へんびっくりしており、必要とあれば、その子のために乳房と乳とをもう一回見出すこともできる位であった。こういう張喩法にでもよらなくては彼女の気違いじみた母性愛はえがき出すことができない。——「なんて綺麗な子でしょう、うちの子は：

「。彼女はモデストとミサに行くとき、前をその美しいエグジュベールが歩いていると、若い友だちのモデストにむすこを見せて、よくそう言った。が、それには何の下心もなかった。——「あなたに似ていらっしやいますわ」とモデスト・ミニョンは「なんていやなお天気なんでしょう」というのと同じように相槌を打った。ほんの添え物ではあるが、この人物の影を写すことも、おおよそ三年越し、ラトゥールネル夫人がこの少女の付添いになっていて、その上公証人と友人のデュメイがその少女に『結婚の生理学』の中で、風落しと呼んだあのわなの一つを仕掛けようと考えていたことを語れば、必要と思われるであろう。

ラトゥールネルについては、この上なし純粹な誠実さが許しうるかぎり狡猾な、ル・アーヴルでこそ馴れっこだが、他国のものが見たら誰でも詐欺師だと思ふだろう異様な顔つきの小男のおやじを想像してもらいたい。いわゆる性の悪い眼のために、この立派な公証人は、たえず赤くなるその眼を守るために、緑いろの眼鏡をかけねばならないのだ。かなり薄い生毛の生えた左右の眉の弧は、レンズの褐色の亀甲縁を五分ばかり越して、何だかその輪を二重にした恰好である。もし諸君が前もって誰か通りすがりの男の顔に、かように重なりながら、間に空隙をおいた二つの円周が生み出す効果を観察したことがないと、こういう顔がどんなに人の心を悩ますか、想像できまい。ことに、その血の気のない肉のこけた顔が、絵描きたちによって猫の顔に似せてかかれたメフィストフェレスの顔のように、先

がとがっているならなおさらだ。こういうのも、バビラス・ラトゥールネルの示している類似はそういうものだからである。その酷薄な緑の眼鏡の上に丸禿げの頭蓋がそびえているが、それは作り物で、見たところ動きを与えられているらしい鬘が、無遠慮にもあちこちから白髪をはみださせ、至るところ額を不揃いに区切っているため、なお一層作りもののめいている。鞘翅類のように黒い服を着、まるで二本の針みたいな両の脚でつつ立っているこの尊重すべきノルマンディー人を眺め、しかもこれが世にたぐいえない潔白な男であると知って、この容貌上の背理の理由をたずねても、人はそれを見出すことができない。

ジャン・ビュッチャは、親に棄てられた哀れな私生児で、書記のラブロスとその娘が面倒を見て来たのだが、勉強のおかげで筆頭書記となり、主人のもとで住まいと食事をあてがわれ、主人から九百フランの給料をもらっており、露ほども青年の面影がなく、ほとんど小人で、モデストを偶像のようにあがめ、彼女のためなら、命を投出したかも知れない。この両の眼があつぽつぽつと眼蓋に押しせばめられながら二条の砲火のように輝き、あばた面で、びつたりへばりついた髪の毛に押しつぶされ、巨大な手を持ちあつたっている哀れな人間は、七つのときから憐れみの視線を受けながら生きて来たのである。これだけで諸君に彼の説明が一から十までつきはしないだろうか。物静かで、物思いに沈み、操行は模範的で、信仰に篤い彼は、『愛情』の地図の上で、『望みなき愛』と呼ばれる国の限らない広

妻、不毛で崇高な『欲望』の草原地帯を旅していた。モデ
ストはこの奇態な筆頭書記に、不思議な小人という仇名を
つけていた。この仇名のおかげでビュッチャはウォルタ
ー・スコットの小説を読み、あとからモデストに——「あ
なたも、危急の際、この不思議な小人のぼらの花がおいり
用だと思いでしょ」と言った。するとモデストは言下
に、あの若い娘が自分の気に入らぬ男に投げつける恐るべ
き眼差しで、自分の崇拜者の魂をその泥小屋に撃退してし
まった。ビュッチャは自分で自分に人知れぬ書記^{「明暗」}と
いう仇名をつけていたが、別にこの地口が証人事務所の標
札である二面一組の楕型飾りの起源にまでさかのぼるもの
とは知らなかった。それはそうとして、彼も主人の細君と
同様、ル・アーヴルの外に出たことは一度もなかった。

恐らく、ル・アーヴルを知らない人々のために、この土
地について、ラトゥールネル一家のものの赴く先を、とい
うわけは、筆頭書記も明らかに家中のものだからだが、それ
を説明するついでに一言述べる必要がある。アングーヴ
イルとこのル・アーヴルの関係はモンマルトルとパリの関
係と同じで、それはふもとに町のひろがっている高い丘陵
であるが、ただ町と丘陵が海とセーヌ河に取りまかれてい
るという点、ル・アーヴルは幅の狭い防壁によつていかん
ともしがたく区画されているという点、最後に河口、港、
沿岸地帯がパリの五万軒の家々の光景とは全く別の光景を
呈している点だけが違っている。モンマルトルのふもとに
は、石磔の大海原がこごった青い波を見せているが、アン

グーヴィルでは、いわば風を受けて立ち騒ぐ動く屋根が眺
められる。あの、ルーアンから海に至るまでの、流水との
間に多少広いところもあるがともかく押しせばめられた余
白をおきつつ、大河に沿って進む高地、と言っただけでは
足りぬ、たしかに、そこにある町々、狭間、谿谷、草原な
どを運ねて珠玉のような美観をふくんでいるその高地は、
一八一六年、ル・アーヴルの繁栄のはじまった時期以降、
アングーヴィルに絶大の値打ちを得させた。この自治体は
商人たちのオートウイユ^{*}、ヴィル・ダヴレイ^{*}、モンモラン
シー^{*}となり、彼らは、それぞれの庭の花の匂いがうつつて
馥郁とかおる海の空気を吸うために、その円形劇場の上に
段々に並ぶめいめいの別荘を建てた。それらの勇敢な投機
業者たちは、彼らの勘定台での疲れと、空地もなければ中
庭のないこともしばしばあるぎつしりせまった彼らの家並
みの雰囲気に対する憩い^{*}をそこで得ているわけだが、ル・
アーヴルの人口増加とその城壁の牢乎たる線と沿岸地帯の
拡大のために家々はみなそんな有様なのだ。実際ル・アー
ヴルの心臓として何たる悲しみ、アングーヴィルにとつ
ては何たる喜びだろう。社会発展の法則はまるで茸のよう
に、廓外町のグラヴィルを花咲かせ、それが今日ではル・
アーヴルより注目すべきものとなり、蛇のように斜面の裾
にひろがっている。アングーヴィルの尾根には一本しか道
がない。こういう地勢においてはいつもそうだが、セーヌ
河にのぞむ家々は、必然的に、道の反対側の家々に比べて
莫大な長所を持ち、それらに対してその眺望をさえぎって

いる。しかしこちらにも、屋根越しに見ようとして、見物人のように爪先立ちをしている。とはいえ、ここにも、どこへ行っても同じことだが、さまざまな奴隷の境遇がある。頂上に土台をすえた何軒かの家は、一段と優位を占めるか、または隣りのものに是非ともその建物を所定の高さに保つように強い眺望の権利をうけている。それからまた気まぐれな岩盤はえぐられて何本も道が通じているため、そこできている円形劇場は通り抜け自由で、この隙間から、何軒かの屋敷は町なり、河なり、海なりをそれぞれに見てとることができる。まっすぐそぎ立っているのではないが、丘陵のはずれはかなり急な断崖をなしている。頂上のうねうねした道を行きつくしたところに、サントアドレスその他二三のサン何とかいう村のある狭間と、『大海原』の吠える入江が見てとれる。ほとんど人気がないアングーヴィルのこちら側は、セーヌ河の谷にのぞむ美しい別荘に対して、驚くべき対照をなしている。人々は植物のために、風の吹きつけることを恐れているのだろうか、取引き商たちはこういう斜面の土地が必要とする出費に後込みするのだろうか。……何はともあれ、汽船の旅客は、アングーヴィルの西側の赤裸で細長くえぐれた斜面、豪奢に着飾り、香水を匂わせている金持ちのかたわらにぼろを着た貧乏人がいるのを見出してすっかり驚いてしまう。

一八二九年の交、海側のはずれにある幾軒かのうちの軒、今日では間違いなくアングーヴィルのまん中に当たる家だが、その家はル・シャレと呼ばれていた。今でもなお

きつとそう呼ばれているだろう。それは最初、小さな前庭をひかえた門番の住居だった。この住居の付属していた別荘は、大小の庭園や大鳥籠や温室や牧場つきの家であったが、その持ち主はこの小家を、物好きにも自分の住宅の豪奢さと調和させようという考えをおこし、それをカテジ（イギリス風の田舎家）を手本にして建て直させた。彼はその田舎家と、彼の別荘の建っている段丘の、花や花壇で飾られた芝生を低い塀で仕切り、塀を隠すためにそれに沿って生垣を植えた。彼が百万手をつくしたのに、シャレ（スイス風の牧人小屋）という名をつけられてしまったその田舎家のうしろには、野菜畠と果樹園がひろがっている。牝牛もいなければ牛乳加工場もないそのシャレの囲いといえ、道に面して、もう茂りに茂る生垣のかげに支柱の見えなくなっている柵があるきりだった。道の反対側の、真向かいの、奴隷の境遇にある家にも、同じような柵と生垣が見うけられるが、シャレからはル・アーヴルが眺められる。この小家が、別荘の持ち主であるヴィルカン氏の絶望のたねだった。そのわけはこうである。一つ一つの細部が力強く、「ここに幾百万の金、輝く」と語っているようなこの住まいをはじめて建てた人物は、当人の曰くによると、庭師を遊ばせておきたくないというそれだけのことで、庭園を野良の方に随分大きくひろげた。シャレが出来上ると、そこに住まわせられるのは、一人の友達だけだった。前の持ち主のミニョン氏はこの会計係りを大層可愛がっていた。デュメイがそれに充分なおかえしをしたことはこの物

語によって証明される筈だが、彼はこの住まいを提供すると言ったのである。デュメイは、形式に拘泥して、その主人に三百フランの賃貸料で十二年間の賃貸契約に署名をさせた。するとミニョン氏は、——「デュメイ君、よく考えてみるがいいよ。あんたはわしのところで十二年間暮らすという約束をするんだね」と言いながら、喜んでそれに署名した。

これから物語るはずの色々な事件のおかげで、以前ル・アーヴルで一ばん富裕だった取引商ミニョンの不動産は、取引市場での彼の敵対者の一人であったヴィルカンに売られてしまった。有名なミニョン別荘を捲き上げたのがうれしくて、取得者はその賃貸契約の解除を要求することを忘れた。デュメイは売却をしくじらせたくないばかりに、そのとき、ヴィルカンの要求することなら何にでも署名したことだろう。けれどもひとたび売却が完了すると、彼はまるで復讐の一念ここにこごったかのように、賃貸契約に固執した。彼はヴィルカンのかくしの中、ヴィルカン一家のまったく中にいつづけて、ヴィルカンを観察し、ヴィルカンをうるさくさせ、要するにヴィルカンの蛇であった。毎朝窓口に立つてヴィルカンは、あの珠玉のような建物、あの六万フランかかったシャレをまのあたり見て、ひどく窮屈な心持を感じた。それは陽をうけて紅玉のようにきらめいているのだ。この比喩は正しいと言っている。建築家はその田舎家を、白い漆喰でつないだ無上に美しい赤煉瓦で建てていた。窓は鮮かな緑に、羽目板は黄がかった

褐色に塗ってある。屋根は数尺突き出ている。くつきりした気持のいい柱廊が二階を占め、ヴェランダのガラスでできた囲いが、建物の正面のまん中に突き出ている。一階は小ぎれいなサロンと食堂からなっているが、両者は木の階段の踊り場でへだてられ、その階段の設計と装飾がまた優雅で簡素なものである。台所が食堂と背中合せになり、サロンの方は、裏が、当時デュメイ夫婦の寝室として用いられていた小部屋になっている。二階に、建築家は、それぞれに化粧部屋のついた大きな部屋を二つしつらえ、そのサロン役をヴェランダがつとめている。それからその上には、左右から凭せかけた二枚のカルタ札そっくりの屋根棟の下に、雇人部屋が二つあって、それぞれ一つの円窓から明りを取り、屋根裏部屋作りだが、かなり広い。ヴィルカンは了見のせまいことに、果樹園と野菜畠の側に塀を立てた。その仇打ち以後、賃貸契約によってシャレに残されている数平方メートルはバリの庭そっくりである。シャレに映りのいい建て方で、塗装の施された付属建物は、隣り屋敷の塀と背中合せになっている。この愛らしい住まいの屋内は、外部と調和がとれている。隅々までごく堅い木の嵌木床になっているサロンは、見る目に、シナうるしをまねたみごとな塗りを見せている。金の枠の入った黒の地に、シナ人の好んで描く多彩な鳥ども、ありうべからざる緑の葉の茂み、幻妖な図柄ががやいている。食堂は隅々まで、美しいロシヤの小屋の内部のように、刻みと彫りの入った北方の木材でおおわれている。踊り場と、階段の欄

干とが形作っている小さな控えの間は、古木の色に塗られ、ゴチック趣味の装飾を見せている。更紗を張った寝室は、金のかかった簡素さによって人目を惹く。当時会計係りとその妻の臥しどになっていた小部屋は、羽目板の張り方も、天井の張り方もまるで商船の客室のようである。こういう教寄者好みの凝りようで、ヴィルカンの激亢の説明はつく。この哀れな取得者は、その田舎家に、自分の婿と娘を住ませようと思っていたのだ。デュメイの知るところとなったこの計画が、行く行く、諸君に、彼のブルターニュかたぎの頑強さの説明になるだろう。シャレに入るには、格子造りの、檜の穂が棒杭と生垣より数インチ高く突き出て並ぶ小さな鉄門から入る。壮麗な芝生と同じ広さの小庭は、その当時、いろいろな花、ばら、ダリヤ、その他温室花卉の中のもつとも美しい、もつとも珍奇な品々で一ばいだった。というのは、これがヴィルカンの苦悩の別の種なのだが、小さな優雅な温室、型破りの温室、いわゆる奥様の温室はシャレに属していて、ヴィルカン別荘を田舎家から引き離している、というか、何なら、それに結びつけていると言ってもいい。デュメイにとって、温室の世話は帳面つけの慰めだったし、温室から生み出される異国趣味の品々は、モデストの楽しみの一つにもなっていた。昔は、この温室と、ヴィルカン別荘の柱廊みたいな球撞き部屋は、小さな塔の形をした大鳥籠によって連絡していた。けれども塀が建ち、果樹園の眺望をうばわれてからこっち、デュメイは通路の戸口を壁でふさいでしまった。――

「壁には壁さ」と彼は言った。――「あんたとデュメイは、文句の言合いですな」と言つて、取引き商たちは、ヴィルカンをむしゃくしゃさせた。そうして毎日、取引所の連中は、このやつかんでいる投機業者に会釈代りの新しい地口を言つた。一八二七年、ヴィルカンはデュメイに、賃貸契約を解除するため、六千フランの給料と二千フランの賠償金を与えようと申し出た。会計係りは、昔自分の主人の手代だったゴベネムのところで三千フランとっているだけだったが、拒絶した。これは信じてもらいたい、デュメイは、ノルマンディーで〈運命〉のお仕込みを受けたブルターニュ男である。三百万も金のある金満家、ノルマンディー男ヴィルカンが、そのシャレの借家人たちに対して抱く憎惡のほどを判断してもらいたい。金持ちに対して金の無力を証明してみせるとは何たる巨富毀損の罪であろうか。ヴィルカンは、その絶望のためにル・アーヴルの笑い話のたねとなつていたが、最近もデュメイに仲々いい住まいを完全な所有権つきで提供し、またしてもデュメイに拒絶された。この頑固さには、ル・アーヴルも氣を揉みはじめていたが、その理由は、多くの人々にとっては、こういう言葉のうちに見出された。――「デュメイはブルターニュ人だ」。ところで会計係り自身は、ミニョンの奥さん、ことにお嬢さんがよそのどこに住むのも、住まいとしてひどすぎると思つていたのである。彼の神像二人は、その人たちにふさわしい神殿に住み、少くも、没落した人々にはしばしば欠けることのある一種の礼儀に当たる豪奢な茅屋の利

益を受けていたのであった。そこにさえいれば、失脚した国王たちも、身のまわりの品々の尊厳を保ちえたわけなのだ。多分人々は、モデストの住まいと平日頃の仲間を前もって知っておくことをあらずもがなには思わないだろう。というのは、彼女の年ごろでは、性格自体人間や物事から消せども消えぬ刻印を受けるものだが、それらは性格と同じ位の影響を将来に対して及ぼすからである。

ラトゥールネル一家のものがシャレに入ったときの態度をみれば、縁もゆかりもないものにも、毎晩彼らがそこに来ているのだということがよく察せられたことだろう。

「もう来ておいでですか、旦那さん。……」と公証人は、サロンの中に、ル・アーヴルの若い銀行家であるゴベネムをみとめて、そう言った。ゴベネムはパリの大商會主のゴベネム・ケレルの親類筋の人間だった。

蒼白な顔で金髪の、動きのない視線に何かしら人を魅するものを持つ黒い眼をした男の一人である、この、生活も言葉も同じように質素な、黒ずくめの、肺病疾みのように瘦せてはいるが骨組みの頑丈な青年は、自分のものと主人の家族と自分の会計係りの家と交際を深めているところだったが、それは、愛情よりずっと余計に打算にもとづいていた。そこでは一勘定二スーでウイストの勝負が行なわれ、なりにはかならずしも念を入れたかったし、頂戴するのはコップについだ砂糖水だけで、しなければならぬ返礼など、全然なかった。表向きミニオン家に一身を献げているらしいこういつた様子的のために、ゴベネムは情の篤い

男だとひとりでに思い込まれ、彼にル・アーヴルの上流社會に行つて、そこで無駄な金をつかい、彼の日常生活の經濟を乱すようなことをしないですむようにしてもらえた。

この『金の牡牛』の洗礼志望者は毎晩十時半に寝て、朝五時に起きた。最後にいうと、ゴベネムは、ラトゥールネルとビュッチャの口の堅さには信用がおけたので、彼らの目の前で厄介な仕事を解きほぐし、それを公証人の無料相談に持ちかけ、取引市場の取沙汰を正当な値打ちに引きもどすことができるのだった。この丁稚修業中の金吞み(ビュッチャの言葉)は、化学で吸収性物質と呼ばれる物質の性質に属していた。ケレル家の意向で彼は、ミニオン商會に、高級海上商業を習い覚えるために下宿させられたのだが、ミニオン商會をおそつた破局以来、シャレには、彼に何にせよ、ほんの簡単な使いすら、してくれと頼むものはいなくなっていた。彼の返事は知れていたからである。この若者はモデストを、二スーの石版畫をためつすがめつするように眺めていた。――「あれは『商業』という巨大な機械のピストンの一つですよ」と哀れなビュッチャは彼について言い言いが、ビュッチャの才智の片鱗は、内気な口調で飛ばされるちよつとした文句にしのばれた。

ラトゥールネル一家の四人はこの上なくうやうやしい敬重の念をもって、黒ビロードの服を着た老婦人にお辭儀をしたが、老婦人の方は、腰をおろしていた脇掛椅子から立ち上がらなかった。というのは、彼女の両の眼はそこひのためにできた黄いろいほしに覆われていたのである。ミニ

「ヨン夫人はただのひとことで描き出すことができよう。彼女は、非の打ちどころのない生活をもって『宿命』の打撃に立ち向かい、その矢面に立たされている、あのあまたのニオベール^{*}の部族を形作る、一家を抱えた母親たち独特の敵かな顔で、たちまち、人の眼を惹く女であった。ちぢらし方もかぶり方もよくできた彼女の金髪のかつらは、ミルヴェルト^{*}の描いた町長^{ブルグムスト}の妻たちの容貌にさも似た、白い、冷やかさを加えた彼女の容貌によくうつった。彼女の身じまいの度外れな念の入れ方、ピロードの編上げ靴、レースの襟、まっすぐにかけた肩掛け、すべてがモデストのその母に対する細やかな心遣いを明らかに示していた。

公証人の宣布した沈黙の一刻が、この感じのいいサロンの中に成り立つと、母のそばに坐って、彼女のために襟巻きの縫いとりをしているモデストは、いつと時の間、諸人の視線の照準点となった。訪問客の誰もが、そればかりでなく毎日会っている人々でさえ、お互いにかげあう、あの、俗悪な質問のかげにひそんでいる好奇心さえあれば、無関係な人間にも、若い娘に対してたくらまれた日常的な陰謀はあばぎ出されたことだろう。けれどもゴベネムという人間は無関心以上で、何にも気がつかず、カルタ機の蠟燭に火をとぼした。ビュッチャやラトゥールネル家のものたちや、特に、自分の夫がモデストの恋人を、まるで狂犬のように射撃しかねないことを知っているデュメイ夫人にとっては、デュメイの態度は、この情況を恐るべきものにした。晩餐のあとで、会計係りは、裏切る懸念のある二匹の

堂々たるビレネー産の犬をつれて散歩にでかけ、それを元ミニョン氏の分益小作人だった男の家において来ていた。それからラトゥールネルの入つて来るしばらく前に、彼は枕許のピストルを取り上げ、モデストに隠れて、それを燐燐の上に置いた。若い娘は、少くも奇妙なこういう準備の一つ一つに、全然注意を払わなかった。

小男でずんぐりし、あばた面の、ごく小聲で話をし、自分のいうことに耳をかたむけているような様子ではあったが、昔親衛軍の中尉をつとめたこのブルターニュ生まれの男は、その顔にそれこそはっきりと刻み込まれた決断力と冷静さを示しているので、二十歳の頃、軍隊でも誰一人、彼をからかうものはなかった位である。彼の落ちついた青い色の両の眼は、二片の刃金に似ている。彼の物腰も顔の様子も、話し方も身なりも、すべてが彼の、デュメイという簡潔な苗字に合致している。彼の腕力は、もとよりよく知れたつていて、彼に、どんな加害行為をも恐れななくてもよいようにしている。拳骨一つで一人の人間を打ち殺すことのできる彼は、バウツェン^{*}で、自分の中隊の後尾にいて、武器を持たずに、一人のサクソニヤ人と面と向かつたとき、この人命損傷を遂行したことがあった。ちょうどこのとき、この人のしつかりとしておだやかな相貌は、崇高をきわめた悲壮さに達した。顔色と同じように血の気のない彼の唇は、ブルターニュ人特有のたくましさで抑えつけられた痙攣を示し、うつすらした、とはいうが誰の目にもつき、誰でも冷い汗だと推測できる汗が、彼の額を濡

らしていた。公証人は、すべてこういうことの結果、重罪裁判所の劇が生じうることを知っていた。実際会計係りとしては、モデスト・ミニョンに關して、社会的靚帯の重要さより一段高い重要さをもち、万一不幸の生ずる場合には、ただ天上にあるものによつてのみ裁かれる底のあの契約に基づいて生まれる名譽、信念、感情を賭けた勝負を自分相手にやっているのであった。劇というものは、大抵われわれが自分で事物について抱く觀念のうちに存するものだ。われわれの目に劇的と見える事件は、他でもなく、われわれの魂がわれわれの性格のままに、悲劇あるいは喜劇に転化させる主題なのだ。

ラトゥールネル夫人とデュメイ夫人は、モデストを観察する役を負わされていたので、彼女らの挙措のうちには何かしら借り物らしいところがあり、その声には震えがあったが、当のモデストは被疑者である自分のやっているので縫いとりが大層心をうばわれている様子で、そういうことに気がつかずにいた。モデストは、縫いとり女工たちでさえ口惜しくなりそうな完璧さで木綿糸を一本一本かぶせて行つた。彼女の顔は、とりかかった花の仕上げに当る花弁の、艶けしの色が惹きおこす喜びを、あますところなく語っていた。主人の妻とゴベネムの間に坐つた小人は、涙をこらえていた。彼は、モデストの耳にはんのひとこと忠告の言葉を吹き込むために、どうして彼女のそばまで行つたものか思案しているのだった。ミニョン夫人の前に陣どつたラトゥールネル夫人は、信心女につきものの悪魔的な知力を

はたらかせて、あらかじめモデストを孤立させておいたのだ。盲目の上に無口なミニョン夫人が、平生の蒼白さのために青白い以上に血の気がなかったのは、モデストがこれからどんな試練をうけようとしているかが彼女に分かつていることを、充分語っていた。恐らく彼女は、この計略を、必要なものとは思ひながら、最後の刹那には、非難していたのだ。そこから彼女の沈黙は生まれた。彼女は心の中で泣いていた。わなを落とす役のエグジュペールには、偶然自分に役が廻つて来たこの台本が全く分かつていなかった。ゴベネムは、モデストが示している無頓着と同じ無頓着さをつづけていたが、それはその性格の結果であつた。事情を知つた見物人には、一方の完全な無知識と他方の胸をどきどきさせている期待との間の対照は、崇高なものだつたらう。今日では、いつにもまして小説家はこういう効果をよく使うが、それは彼らの權利に属する。というわけは、自然は、いつでも、遠慮なく、彼らより強力だからだ。ここで自然というのは、やがて分かる通り、自然の中の一つの自然である社会的自然なのだが、それがここで、奔流が画家には許されぬさまざまな幻想画を描き、彫像師や建築家がびっくりするような石の配置やねぶり方をして妙腕を発揮するのと同じように、小説よりもっと面白い物語を作るたのしみに耽つていたのである。ちょうど八時だった。その季節のこととて、たそがれの最後の微光がさす頃合である。その晩は、空には一片の雲も見当たらず、ぬるんだ空気が大地をやさしく撫で、花のよい匂いが